古書のたのしみ（令和六年六月）

土屋　博

一「日本略史　巻之一」陸軍省蔵版
（文彫堂翻刻、明治十五年、五二丁）

古書價格百圓也。例言に曰く、「我邦の史書世に乏しきに非ず。但記載浩瀚なるを童蒙初學毎に記憶に便ならざるを苦む。故に今勤めて繁を捨て要を取り治亂興廃の大意を得んことを欲す。」と。巻之一には従元年至一千八百四十年を収録す。

冒頭部分は、「元年正月神武天皇橿原の宮に即位の是より先き前七年天皇日向高千穂の宮に在り。」に始まる

二「源注餘滴　全」石川雅望著
（國書刊行會、明治三十九年刊、非賣品、本文四八六頁、索引六六頁）

古書價格千五百圓也。

本書は源氏物語の註釋書にして、凡例に曰く、「此ふみもはら湖月抄よむ時のためにとてつゞりつ。さる故に湖月抄にくはしくあげたることは爰にはもらしていはず」と。契沖（一七〇一年歿）、眞淵（一七六九年歿）、宣長（一八〇一年歿）などの説を縦横無盡に引用紹介す。

著者の石川雅望（まさもち）（一七五四年生れ、一八三〇年歿）は江戸時代の狂歌師・國學者。

三「慎思録」貝原益軒先生遺著、足立栗園先生譯註並びに校訂
（東亜堂車上叢書、明治四十四年刊、正價金六拾錢、三六四頁）
古書價格三百圓也。
貝原益軒（一六三〇年生れ、一七一四年歿）の遺著なり。
井上哲次郎先生（一八五六年生れ、一九四四年歿）、本書籍の推薦文に曰く、「慎思録は益軒晩年の作にして、益軒著書多しと雖も、彼が道徳に関する學説は大抵此書中に叙述せり。格言の以て服膺すべきもの、勝げて數ふべからず」と。
慎思録冒頭は、「人生れて學ばざれば、生れざると同じ。學んで道を知らざれば學ばざると同じ。」の一節に始まる。

四「新井白石修養訓」足立栗園編述
（富田文陽堂、大正四年刊、定價金六拾錢、三四二頁）
古書價格二百圓也。
新井白石は（一六五七年生れ、一七二五年歿）の著作はより知らるべきものと信ず。。
例言に曰く、「本書は近世の文豪新井白石の著書随筆中より、吾人の立志修養に資すべき文字を抜萃し、之に解釋を施し、以て日常の座右箴とすると同時に、漢文修習者の便に供せしもの也」と。
本書冒頭は、「貧家讀書の子は、常に蔵書の少きに苦しみ、富家讀書の子は、常に蔵書の多きに苦しむ。貧富二家の子少長にして一書を讀むも所見還て浅深あり。」に始まる。

五「世界教育文庫　第二部傳記篇　Ⅰ貝原益軒、山鹿素行、吉田松陰」
（世界教育文庫刊行會、昭和九年刊、定價貳圓）
古書價格三百三十圓也。序言によらば、貝原益軒は「和俗童子訓」を以て我が國最初の系統的教育書を遺し、山鹿素行は「山鹿語類」を以て教育史上に著大の地位を占め、吉田松陰は武教講録と女訓を以て教育眼を開けりとぞ。
本書には三人の偉人の教育課程記され居り。一例を挙ぐれば、益軒の幼時に兄、塵劫記（江戸時代の算術入門書）を探したる処、益軒の机中に發見し、叱りたるところ、益軒、本にある算盤計算法を過たず直ちに行ひたる由。

六「演義　三國志圖鑑」
（愛知縣引揚者相談所、昭和三十六年刊、頒布特價金参千圓也）
古書價格千五百圓也。

天保年間發行の「繪本通俗三國志」を底本とし、圖版の筆者は葛飾北斎なり。賴山陽の序の筆跡及びその現代語譯を附す。

山陽曰く、「元来蜀魏呉の三國のうちすべての點で蜀は一番正しいが運命には一番悩む。関羽、張飛、劉備と次々に死去し、孔明もまた志業達成の半途にて生命を終へる。これは昔から口惜しくも悲しい事と言はれてゐる。羅貫中の演義の方では正史に悶へた者も明るい気持で讀むことが出来るようにした」と。

北斎の桃園にて義を結ぶの圖をここに添付せむ。

七「桑原隲藏全集第四巻」

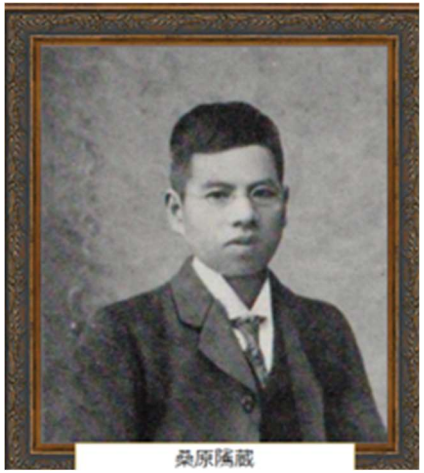
（岩波書店、昭和四十三年刊、定價二千五百圓、七七九頁）

古書價格五百圓也。

桑原隲藏（一八七一年生れ、一九三一年歿）は、東洋史學者、京都帝國大學教授。仏文學者桑原武夫の父親。

本書には、中學生向けに書かれたる教科書及びそれに準拠したる教師用の教授資料を収録す。特に後者の教授資料は注目すべきものにして、当時ベストセラーとなれり。小生も大正十三年増補再版本を別途所有せり。「漢族の起源」より「清朝末年の制度改革」までの二百四十二項目を詳述す。

今日東洋史を學び直す意義大なりと信ず。



（令和六年七月八日受附）